

〔巻頭言〕

## 認定委員会の窓から

北海道大学名誉教授 波 岡 茂 郎

かつて、水産学の分野では大洋の回遊魚をいかに効率的に捕獲するか技術の開発に余念がなかった。しかし海洋資源の保護や、領海水域の漁業の規制が高まるにつれ、養殖漁業の比率が上昇してきた。現在の世界の総漁獲量は1億3000万トンであるが、養殖魚のそれはすでに2000万トンの多きに達し、この辺が養魚量の限界だろうとされている。一方、養殖魚が洋上捕獲と大きく異なるのは、それが生け簀で密飼いされ、常に感染症の脅威にさらされていることである。このことと豚や鶏の多頭羽飼育の状況とはきわめて類似しており、養殖魚の場合もいかに疾病をコントロールするかが最大の懸案事項となっている。そのひとつとして種々のワクチンの開発があげられており、要するに限りなくSPF状態に近づける努力がなされている。たとえばノルウェーでは3つの生け簀を輪番で使用し、常にひとつは空けておく。ワクチンの強化、健康診断の義務化、品質保証システム、秩序ある生産出荷体制などが実行されている。さらに抗生物質の使用をなるべく減らし、有効なワクチンによる感染症の予防に努めている。このような養殖魚の生産方法はSPF豚飼育に種々の示唆を与えてくれるため、私どもも現在行われている養殖魚の技術に大きな関心を持たざるをえない。

ところで、米国の養豚界ではしばしばbeginner's profitという言葉を使う。「新参者の大儲け」とでも言えよう。新しく豚舎を建て、GP農場からSPF種母豚を導入し、マニユア

ルドおりにまじめに飼育すると想像以上の成績があがる。たまたま出荷時期が豚価の高い時に巡り会うと大儲けする。そこで少しぐらい手を抜いてもと思うのが人情である一方、このことが以後の成績を大きく左右することになる。

毎年SPF豚の認定農場の査定を行っている、同じピラミッドのGP農場由来PS豚を飼育していても個々の商業農場でその成績がかなり異なる。また年余にわたって同一の好成績をあげている農場がある一方、年を追って成績が下降するところもある。これらの状況を種々面から検討すると、それを裏付けるデータが浮かび上がってくる。各ピラミッドの責任者や認定作業にあたる獣医師はこのことに対して苦慮し、なんとか認定にこぎつきたいと四苦八苦する。ここで各SPF豚飼育者が自分たちの成績がどのようなレベルにあるのかを協会が毎年公表する「CM認定農場生産成績のまとめ」等で再確認することを強くすすめたい。そうすることによって己が欠陥をいかに是正すべきかが明らかになろう。わが国社会の改革があらゆる分野で叫ばれている昨今であるが、養豚におけるSPF化はまさに時代を先取りする画期的な技術革新であったはずである。水産界では洋上捕獲から養殖魚への転換のなかで、限りなくSPF化に近づけたいと努力している反面、すでにSPF化の技術が導入されている養豚界で、あるべき成績が持続できないとなると、SPF養豚家一人一人の真剣な反省が求められよう。